



## 絶好のチャンス

杉山 進\*

百年に一度といわれる世界金融危機により、日本経済は強烈な打撃を受け深く沈みこんでいます。バブル崩壊後の10年を乗り越え、経済が右肩上がりに順調に進んでいた矢先でした。しかし、順調に進んでいたといわれるこの経済成長は、真の日本の産業競争力すなわち、資源の乏しいわが国においては科学技術力に立脚したものであったのでしょうか。新興工業国の台頭により、これまで付加価値製品といわれていたものさえ低コスト競争の渦の中に入って行きました。これに対応するために、20年以上前まではそんなに目立たなかった非正規雇用による生産の担い手の比重が、年を追うごとに急激な勢いで高まってきました。グローバル経済の渦の中で勝ち抜くためにはやむを得ないとしても、長期的にはどう見ても労働資源コストの高い日本に勝ち目のないことを誰もが予測できます。技術創造力で勝負すべきであることは自明のことです。

未曾有の経済危機により、産業構造にリセットがかけられました。これまでの工業製品の価値評価は、その製品の出力性能、すなわち「多い」、「強い」、「速い」に偏っていました。それが、その生産過程で費やされるエネルギー、および同時に生産される環境負荷を負う指標として評価する規範に変わりつつあります。実は、これらの評価規範はこれまでたびたび襲来した石油危機のときに叫ばれたことであり、その後の、石油価額の安定回復によって忘れ去られ、優先順位がどんどん後回しにされてしまっていたのです。

今次の経済危機はこれまでとは違う大きさと深さを持っており、この危機を日本産業のみでなく、人間社会にとって絶好のチャンスとしなければなりません。経済問題、エネルギー問題、地球温暖化問題を緊急に解決することが迫られており、多くの物的、人的資源を投入する環境が整いつつあります。これに応えられるのは、科学技術創造力しかありません。科学技術に立脚した日本の「ものづくり」技術がフロンティアとなることを世界は待っています。

経済問題、エネルギー問題、地球温暖化問題をセットで解決するには、電気自動車、太陽電池で代表される「電」がやはり主軸になります。この主軸の性能を活かすも殺すもエレクトロニクス実装技術にかかっているとんでもない過言ではありません。物理、化学、機械、電気・電子、情報、通信など広範な工学融合を基盤としたエレクトロニクス実装学会で扱う技術は正に「ものづくり」の粋であります。社会に吹き荒れている逆風を順風に換える新技術創造の大事業に参加できることは、エレクトロニクス実装学会の一会員として大きな喜びです。